

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿

—— 第六帖 (18) 鳥ノ鶴 ——

福田 智子

本稿は、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(9) 芹ノ青葛―(『社会科学』第四十三卷第四号〈通巻一〇一号〉、二〇一四年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(10) 朝顔ノ葵―(『社会科学』第四十四卷第四号〈通巻一〇五号〉、二〇一五年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(11) 酢漿草ノ苔―(『社会科学』第四十五卷第一・二号〈通巻一〇六号〉、二〇一五年八月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(12) 蟬ノ鈴虫―(『文化情報学』第十一卷第一号〈通巻一四号〉、二〇一五年一月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(13) 螢ノ蝶―(『社会科学』第四十七卷第一号〈通巻一二三号〉、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(14) 木ノ紅葉―(『文化情報学』第十二卷第二号〈通巻一七号〉、二〇一七年三月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(15) 檀ノ紅梅―(『社会科学』第四十七卷第二号〈通巻一一四号〉、二〇一七年九月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(16) 柳ノ橘―(『文化情報学』第十三卷第一・二号合併号〈通巻一八号〉、二〇一八年三月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(17) 椎ノ山萵菘―(『社会科学』第四十八卷第二号〈通巻一一八号〉、二〇一八年九月)の続編として、『古今和歌六帖』第六帖の「鳥」から「鶴」までの題

に配されている出典未詳歌、十首について注釈を施し、表現のあり方を考察したものである。これまで同様、底本には書陵部蔵桂宮本(『新編国歌大観』の底本)を用い、江戸期の流布本である寛文九年(一六六九)版本を含めた九本の伝本の本文異同を視野に入れる。凡例は、『社会科学』第四十三卷第四号に詳述しているもので、その概略を記すにとどめる。なお、巻末には、別出一覧を示す。鳥ノ鶴題の歌(四三二九―四三五四番)を対象とする。これについての凡例も、前稿を参照されたい。

凡例

一、底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。
二、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は原則として示さず、語の異なりのみを示すが、和歌の解釈上、重要と思われる表記の異同は、必要に応じて適宜示す。諸本とその略称は次のとおり。

○永青文庫蔵北岡文庫本

略称(永)

○島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本

略称(松)

○内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本

略称(和)

○内閣文庫蔵林羅山旧蔵本

略称(羅)

○神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本

略称(林)

○神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本

略称(宮)

○田林義信氏旧蔵本

略称(田)

○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本

略称(黒)

○寛文九年版本

略称(寛)

三、和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

注釈

四三三二 (とり)

【本文】

冬山にひとりぬるとりよをさむみひとはたえけるきをぞもとむる

【校異】

○人はたえー冬山に(永・松・和・羅・林・宮・田・黒・寛) ○たえたるーたへける(永・松・和・羅・林・宮・田・寛) たへける(黒)

【語釈】○冬山 冬枯れの山。 ○ひとりぬるとり 「ひとり」

は、たった独りで。また、「火取り」(火を取って)を掛けるか

【考察】参照。「ひとりぬるとり」は、「とり」の同音反復。

○よをさむみ 夜間は気温が下がって寒いので。「……を……み」は、ミ語法。 ○ひとはたえける 人の行き来がなくなつた。「人」は、春や秋の物見遊山の人や、山に分け入って作業をする木こりや薪拾いの人などが想定される。また、「人は」に

「一葉」を掛け、「一葉絶えける」で、葉が一枚もなくなつた意を重ねるか(「考察」参照)。なお、第二句「ひとり」と第四句「ひと」は、句頭「ひと」の同音反復。

【通釈】冬枯れの山に、たった独りで寝る鳥は、夜が寒いので、人は訪れなくなった(山の)木を尋ね探すことだ。

【他出】なし

【考察】

人の訪れの途絶えた凍える冬山の木に、一羽だけでねぐらを求める鳥の寂寥を詠んだ歌である。なお、「独り」に「火取り」、「人は」に「一葉」を掛けるとすれば、すっかり落葉してしまつた冬山の木を、暖を取るための薪として探し求める意があるか。

「冬山」の用例は、平安中期に集中して見られる。「なにをかもなぐさめにせむ冬山のふりつむ雪のとくるまつまは」(源賢法眼集・三八・としごろ、もろともにあるわらはの京にのぼるに)

といった実生活に根差した詠もあるが、「冬やまの雪にはこれるあはれきのうへにぞくゆるのこすつみなく」（源順集・一八三・大納言源朝臣、大饗のところになつべき四尺屏風調ぜしむるうた／十二月、仏名おこなふいへ）は屏風歌、「冬やまのすみやきごろもなれぬとて人をばひとのたのむものかは」（好忠集・三五一・十二月中）、「ふゆやまのみねのわらびはもえねどもふるしらゆきのさえやすきかな」（千穎集・四一・冬十首）、「ふゆやまのゆきふりまがふおほぞらにゆくか返るかかりのさわたる」（千穎集・四二・冬十首）は定数歌に見出される。また、「ちりはててひとはだになきふゆ山は中風の音も聞えず」（和泉式部続集・三二七・冬山／十二月、人のもとより、よみにおこせたりし）は題詠である。当該歌の「ひとは」が「人は」と「一葉」の掛詞だとすれば、この和泉式部の歌の上句の表現に極めて近い。さらに、『宇津保物語』には、「冬山にすくひし鳥も冬さむみ春のさとにややどりとるらん」（かすがまうで・一五五・右兵衛尉ありはらの時かげ）、「ひとりぬるとしはふれどもふゆ山にまだひとはたのみえずもあるかな」（きくのえん・四四六・三のみこ（忠康）の二首の歌が見える。前者の上句は、当該歌の冬山の鳥とイメージが重なるであろう。また、後者は、第四句の「ひとはた」が未詳とされ、「人影」という校訂本文（新編日本古典文学全集『うつほ物語』）も示されているが、上

句の「独り寝る」「冬山」は、当該歌の語句の組み合わせと共通する。

「独り」は、「火取り」を掛けて、「みをつみて思ひしりにきたきもののひとりねいかにわびしかるらん」（元良親王集・一四六・をんな、宮ゑじてよせたてまつりたまはざりけるころ、四宮より）と詠まれる他、『古今六帖』第五帖にも「ひとり」題で、「たきもののかばかり思ふこの比のひとりはいかで君にしらせん」（三三六三）、「たきものこのしたけぶりふすぶともわれひとり（三三六四）、「このしたにひとりやわびしをばしなすまじやは」（三三六四）、「このしたにひとりやわびしたきもののおもひにたへてとかさく」（三三六五）、「わがためはねぶたきものをひとりしもおきあかさじとおもほゆるかな」（三三六六）といった同様の歌が四首収められる。だが、これらの「火取り」は、香を焚くのに用いる香炉のことであり、冬山の鳥を詠んだ当該歌とは一線を画すであろう。

「よをさむみ」という表現は、『万葉集』から例がある。「夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭もはだらにみ雪降りたり」（万葉集・巻十・二二二二・二二二一八）は、『人丸集』一六〇番、『家持集』二七八番にも、ほぼ同様の歌句で収められる。平安期における早い例は「雁がねにおどろく秋のよを寒み虫のおりだす衣をぞざる」（寛平御時后宮歌合・一〇六）、「夜緒寒美 衣借金鳴苗丹 芽之下葉裳 移徒丹芸里」（新撰万葉集・上・一五三）

であろう。勅撰集においては、『古今集』(二二一)が、この『新撰万葉集』の歌を載せる他、二首(四一六・六六三)の歌を収めるのが初出である。その後、『後撰集』は「夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜やおくらん」(冬・四七八・よみ人しらず・題しらず)一首を載せ、次の『拾遺集』は、三首の歌(二二六・二二八・二一九)を収める。『拾遺集』(二二八)番歌は先の『後撰集』の歌であり、また、『拾遺集』一一一番歌は、先の『古今集』二二一番歌の重出である。その後は『続後撰集』まで用例が見えない。万葉から三代集の頃に用例が集中していることと見られる。いわゆるミ語法が十世紀に多く用いられていることを背景としてみると、その一例として位置付けられよう。

「人はたえ(ける)」という表現は、「あふことのかたみのたねをえてしかな人はたゆともみつしのばむ」(素性集・三三三)の他、後世には、「物おもはぬ人はたえける山ざとに我が身ひとつの秋の夕暮」(正治後度百首・八六五・女房宮内卿・ざふ／ゆふぐれ)などがあるが、和歌における用例は意外に少ない。

四三三四(とり)

【本文】

なつかりの玉えの蘆をふみしだきむれぬる鳥のたつ空ぞなき

【校異】○なつかりの―夏引の(田) ○むれぬる鳥の―むれぬるとりの(宮)

【語釈】○なつかりの「蘆」に付く枕詞。蘆が夏に刈り取るものであるところからいう。 ○玉えの蘆 「玉え」は美しい入江。

「玉」は美称。具体的な場所を指すとすれば、蘆の名所である越前国花堂南端の古名、あるいは浅水付近の川を指すか。蘆は刈り取った茎で簾を作る。 ○ふみしだき 「踏み拉く」は、踏み荒らす、踏み散らす意。 ○むれぬる 群れ居る。数多く集まっている。

○たつ空ぞなき 「立つ」は、鳥が飛び上がる意。また、「空なし」で、その気が起こらない、気乗りしない意を表す。

「空」は「鳥」の縁語。

【通釈】夏に刈り取られた玉江の蘆を踏み荒らして、群れ集まっている鳥は、飛び立つ気配がないことだ。

【他出】

『後拾遺和歌集』卷第三夏、二一九番

(だいしらす)

源重之

なつかりのたまえのあしをふみしだきむれぬるとりのたつ

そらぞなき

『俊頼髓腦』二九九番

なつかりのたま江のあしをふみしだき群れぬる鳥の立つ空

ぞなき

『綺語抄』 三五九番

源重之

なつかりのたまえのあしをふみしだきむれゐるとりのたつ

そらぞなき

『奥義鈔』 中積、二〇三番

なつかりのたま江のあしをふみしだきむれゐるとりのたつ

そらぞなき

『和歌童蒙抄』 第七、草部、六二九番

(葦)

なつかりのたまえのあしをふみしだきむれゐるとりのたつ

そらぞなき

『五代集歌枕』 下、九七〇番

(たま江)

重之

なつかりのたま江のあしをふみしだきむれゐるとりのたつ

そらぞなき

『袖中抄』 第十四、六一一番

源重之

なつかりの玉江のあしをふみしだきむれゐる鳥の立つそら

ぞなき

『和歌色葉』 下卷、三七三番

(後拾遺)

なつかりのたまえのあしをふみしだきむれゐる鳥の立つ空

ぞなき

『俊成三十六人歌合』 六四番

右

源重之

夏かりの玉江のあしをふみしだきむれゐるとりのたつ空ぞ

なき

『定家八代抄』 卷第三夏歌、一三三五番

後

源重之

夏かりの玉江のあしを踏みしだきむれゐる鳥の立つ空ぞな

き

『時代不同歌合』 一二三三番

百十二番 左

源重之

夏かりのたまえのあしをふみしだきむれゐるとりのたつそ

らぞなき

『色葉和難集』 卷五、四六六番

なつかりの玉えのあしをふみしだきむれゐるとりのたつそ

らぞなき

『歌枕名寄』 卷第二十九越前国、七四一〇番

玉江 撰津国有同名、古人称夏刈歌当国戦之、聊有伝習

後拾三

源重之

夏かりの玉江のあしをふみしだきむれゐる鳥のたつ空ぞな

き

『井蛙抄』三九三番

重之

夏かりの玉江のあしをふみしだきむれゐるとりのたつそら
ぞなき

『六華和歌集』巻第二夏歌、四六六番

後拾

夏かりの玉江のあしをふみしだきむれゐる鳥のたつそら
き

【考察】

夏になって刈り取られた蘆の入江を、鳥が群れをなして踏み荒らし、飛び立つ様子もなく、ずっと居続けている情景を詠んだ歌である。後述する後世の本歌取りからも窺えるように、さまざまな寓意を付与することもできようが、丈の高い蘆が群生していた入江が、今は、鳥の群れによって占有されているという眼前の情景として、まず解するべきであろう。

当該歌は、『後拾遺集』をはじめ、後の歌論書や歌集に再録される際には、多く源重之の作と明記される。重之には、百首歌の中に、当該歌のその後の情景を詠んだとも解せる「なつかりのをぎのふるえももえにけりうもれしとりはそらにやあるらん」（重之集・二四七・夏廿）という歌がある。本行本文もさること

ながら、第四句の傍書を採れば、表現もよりいっそう近くなる。

「なつかりの蘆」は、当該歌以降、鎌倉期に入り、当該歌の本歌取りとして詠まれるようになる。「夏かりのあしのかりねもあはれなりたまえの月の明がたの空」（新古今集・羈旅・九三三・皇太后宮大夫俊成・守覚法親王家に、五十首歌よませ侍りける旅歌）の他、「なつかりのあしのまろやのけぶりだにたつそらもなき五月雨のころ」（続古今集・夏・二三八・洞院撰政左大臣・五月雨を）、「夏かりのあしふみしだくみづとりのよにたつそらもなき身なりけり」（続古今集・雑上・一五五二・静仁法親王・夏草をよみ侍りける）などがある。

同様に、「なつかりの玉えの蘆」の用例も、平安期においてはまず他に見られず、鎌倉期の藤原家隆の二首の歌、「夏かりのたまえのあしも霜がれてはわけの浪に鴛ぞ鳴くなる」（壬二集・院百首・冬・五六四）、「ふみしだき鳥だに絶えぬ夏かりの玉えの蘆に飛ぶ螢かな」（壬二集・玉吟集巻下・夏・二二八五・江蛭といふことを）や、後鳥羽院の「夏かりの玉えのあしの下がくれたくや螢のあまのもしほ火」（後鳥羽院御集・七三三・夏五十首）が見出され、いずれも当該歌の本歌取りである。当該歌が『後拾遺集』に収められたことによる影響が大きからう。

なお、「玉えの蘆」の用例ならば、「なにはがたたまえのあしをふみしだきなくらんたづのわがためにかも」（伊勢集・

四一八)、「みしま江の玉えの蘆をしめしよりおのがとぞ思ふいまだからねど」(人丸集・二七)、「さみだれのながきさつきのみづふかみたまえのあしのなつがりもあらじ」(六条斎院歌合(天喜四年五月)・二二・左衛門・さみだれあまりあり/右)などがある。とくに『伊勢集』の歌は、第二・三句「たまえのあしをふみしだき」が当該歌と一致する。

「ふみしだく」の例は、この『伊勢集』の歌の他、『古今集』の「わがやどの花ふみしだくとりうたむのはなればやここにしもくる」(物名・四四二・とものり・りうたむのはな)や、「鶯の花ふみしだくこのしたはいたく雪ふる春べなりけり」(貫之集・二〇四・三条右大臣屏風のうた)、「きみがみまさがなくつねにはなれつつわがはなぞのにふみしだくめり」(人丸集・二七九・山陽道/みまさか)などがある。このうち『貫之集』の歌は、『古今六帖』(第一・五四・なかのはる・つらゆき)に載る。「葦」の他、「花」についていう例が目立つ。

四三三七 (はなちどり)

【本文】

はなち鳥行へもしらずなりぬればはなれしことぞくやしかりける

【校異】なし

【語釈】○はなち鳥 放ち鳥。羽を切るなどして飛べないようにして、放し飼いにされた鳥。 ○はなれしこと 「はなる」は、捕らえられた動物などが自由になる、逃げ出すの意。「たかがひのまだもこなくにつなぎいぬのはなれていかむなぐるまつほど」(拾遺集・物名・四一九・むなぐるま)

【通釈】放し飼いの鳥が、行方知れずになったので、逃げ出したことが残念だ。

【他出】なし

【考察】

放し飼いにしていた鳥に逃げられた作者の後悔の念を詠んだ歌である。自分のものだと思っていた恋人に裏切られたといった寓意があるか。

「はなち鳥」の例は、夙に『万葉集』に、「鳥の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず」(巻二・一七〇・或本の歌一首)、「鳥の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君いまさずとも」(巻二・一七二・皇子尊の宮の舍人等の働傷して作る歌二十三首)の例があり、前者は『人丸集』四二番にも見える。ただし、『万葉集』は二首ともに、死者追善のための放鳥を指す。平安中期には、用例数は少ないながら、「わががたにちりこざりせば花ちどりあとのゆくへをいかでしらまし」(一条撰政御集・一四五・このひとのかたかいたるさうしを、こゆみにいとり給て)、「は

なちどりつばさのなきをとふからにくもぢをいかでおもひかくらん」(古今六帖・第五・三一・一九・伊勢・になきおもひ)といった例がある。なお、『一条撰政御集』の「花ちどり」という表記は、「はな(放/花)ち鳥」の掛詞であることを端的に示す。もつとも当該歌にはこの掛詞は用いられていない。

鳥を「行へもしら(ず)」と詠んだ歌には、「わすられむ時しのべとぞ浜千鳥ゆくへもしらぬあとをとどむる」(古今集・雑下・九九六・よみ人しらず・題しらず)、「かげろふに見しばかりにやはまちどりゆくへもしらぬ恋にまどはん」(後撰集・恋二・六五四・ひとしの朝臣・題しらず)、「はまちどりあとのとまりをたづぬとてゆくへもしらぬうらみをやせむ」(蜻蛉日記・上・四五・作者)、「とぶとりのこころはそらにあくがれてゆくへもしらぬものをこそおもへ」(好忠集・四四二・好忠百首/沓冠)などがある。《好忠百首》の「とぶとり」の歌以外は、「跡」を残して飛んでいく浜千鳥を詠んだ歌が目立つ。

結句「くやしかりけ(る)」は、「女郎花にほふさかりを見る時ぞわがおいらくはくやしかりける」(後撰集・秋中・三四七・よみ人しらず・前栽にをみなへし侍りける所にて)や、「しるひともなきさなりけるこゆるぎのいそぎいでてぞくやしかりける」(一条撰政御集・一二四・おほやけどころさわがし、いでよとのたまへば、いでたれど、おはせぬつとめて、をんな)、「お

もひつつこひつつはねじあふとみるゆめはさめてはくやしかりけり」(道綱母集・四九・うたあはせに/こひ)、「おほつかなくろどに見ゆるきくのはなあけてのちぞくやしかりける」(実方集・二九六・ある女とちぎりたりけるのち、そらごとなどいひければ、をとこ)などの用例がある。いずれも、もはや取り返しつかない事柄や出来事に対して後悔する気持ちを表す。

四三三八(ひなどり)

【本文】

ひな鳥のかざきりよ^①わみとばねばすこもりながらねをのみぞなく(なりひら)

【校異】○なりひら—ナシ(林) ○かさきり。み^よ—かさきりよ

はみ(永・松・和・羅・林・宮・田・寛) かさきりよわみ(黒)

○す^こ・もりなから—すこもりなから(永・松・和・羅・林・宮・田・黒・寛)

田・黒・寛)

【語釈】○ひな鳥 鳥の子。ひな。ひよこ。 ○かさきり 風切

羽。鳥の羽毛の一種。前肢から後方に向かって生えた一列の大きな羽毛で、翼の主要部にあたる。和歌にはまず詠まれない語。

○とばねば 飛ぶことができないうで。「れ」は可能。「ねば」は、打消「ず」の已然形「ね」に接続助詞「ば」が付き、確定条件を表す。 ○すこもりながら 「巢籠もる」は、鳥などが巢

の中に籠もる意。『古今六帖』四三四一番（出典未詳歌）にも用例がある（後述）。

【通釈】 ひな鳥は風切羽が弱くて飛ぶことができないので、巢の中に籠もったままで、声を上げて鳴くことだ。

【他出】

『高良玉垂宮神祕書紙背和歌』三六番

同（六帖）六

業平朝臣

ひなどりのかざきりよわみとばねばすごもりながらねをのみぞなく

【考察】

ひな鳥が、飛ぶことができないで、巢の中で鳴いている理由を、風切羽の弱さに求めた歌である。

「ひなどり」の和歌における用例は、「雲ぬにもいまはまつらむあしべなる声ふりたつるつるのひな鳥」（元真集・一八八・ひとの子うみたる七夜）をはじめ、それほど多くはないが、『宇津保物語』中に九例が集中して見出される（藤はらの君・六三・七二、さくくのえん・四六六・四六七、内侍のかみ・六六九・六七〇、くらひらさの上・七三七、国ゆづりの中・八四二・八七八）。先の『元真集』歌を含め、「すぎにけるよはひぞのぶる雲ちかくあそびはじむるたづのひなどり」（宇津保物語・さくくのえん・四六六・みかど〈嵯峨院〉）、「君にとてよよを

ば思ひしら雲につらねてあそぶたづのひなどり」（同・同・四六七・みやあこぎみ）など、鶴のひな鳥を詠む例が目立つ。なお、『新編国歌大観』に拠るかぎり、『宇津保物語』ほどひな鳥を詠んだ歌を多く収める作品は見出せない。

なお、永享一〇年（一四三八）までには成立したとされる『秘藏抄』には、「春の野のひめひな鳥ぞあがるなる霞の中に声さこえつつ」（下・一四八・興風）、「ますらをのえむひな鳥をうらぶれてなみだをあかくおとすよな鳥」（下・一五三・業平）の二首の歌が収められる。これらの作者名を信ずれば、『古今六帖』に先行する用例ということになる。また、当該歌と同じ、業平詠が見出せる点にも留意される。

「すごも（り）」の和歌の用例も、多くはない。「つるのおほくよそへてみゆる浜べこそ千年すごもる心なりけれ」（貫之集・九〇七・ただひらと申すおとどのにしろるとのにうつり給はんとして、そのとののひとつやに御むすめのないしのかみのおはすべきかた、とのの屋のさうじに松つるなどひとつかべにかきたる、だいにてよませ給ふ）は、障子絵の鶴を詠んだ歌である。鶴の例は、『古今六帖』四三四一番（出典未詳歌）にも見える（後述）。また、鶯についていう「こほりとくかせのおとにやすごもれるたにのうぐひすはるをしるらむ」（内裏歌合〈寛和二年〉・三・少将斉信・鶯 左ち）といった例もある。その他、「秋をへ

てこよひのことは松がえにすごもるせみもしらべてぞなく」(宇津保物語・ふきあげの下・三九九・みかど(朱雀院)のような鳥以外の例もあるが、和歌の用例としては稀少である。

四三三九(ひなどり)

【本文】

明けぬとてなにいそぐらむひなどりのまだとぐらなるこゑにやはあらぬ

【校異】 ○なにいそぐらしーなにいそくらん(永・羅) なに急くらん(松・林) なに急らん(和・宮) 何いそくらん(田・黒) 何いそく覧(寛) ○こゑ。やはーこゑにやは(永) 声にやは(松・和・宮・田) 聲にやは(羅・林・黒・寛)

【語釈】 ○なに どうしてまた。 どういうわけで。 動機が不明で納得のゆかない気持ちを表す。 ○いそぐ しなければならぬいことに早くとりかかる。 急いで事を行なう。 ○とぐら 鳥の寝るところ。 鳥のねぐら。

【通釈】 夜が明けたといって、どうしてそんなに急いでいるのだろうか。 ひな鳥がまだねぐらにいて鳴いている声ではないか。

【他出】 なし

【考察】

夜が明ける前に、男性は女性のもとから帰らなければならな

いが、当該歌は、夜明けを告げる鶏の声がしたかと慌てて出て行こうという男性に対し、それはねぐらで鳴いているひな鳥の声ではないかと諫め、男性を引き留めようとする女性の歌である。

もつとも、男性が宮中の帝であれば、次の『宇津保物語』「内侍のかみ」(六六九・六七〇)に載る贈答歌のように、夜をともした女君を、明け方、帝が引き留めるといふ状況も想定し得る。

上、おはしまして、よろづにあはれにをかしき御物語をしつつおはしますほどに、夜暁になりゆく。鳥うち鳴き始めなどするに、上、『まれに会ふ夜』と言ふことは、まことなりけり」などのたまふ。

暁の声をば聞かて雛鳥の同じとぐらに寝るよしもがな(六六九)

とのたまへば、尚侍、

卵の内を夢より睨る雛鳥は高きとぐらをよそに見るかな(六七〇)

と聞こえ給ふほどに、夜明けなむとするに、尚侍のおとど急ぎ給ふに、やうやう日など見ゆるほどに急ぎ給ふ。

(室城秀之校注『うつほ物語 全』おうふう、平成七年十月)

この贈答歌は、尚侍となった俊蔭女が、朱雀帝と一夜を過ごした夜明け方に退出する場面で交わされる。当該歌やこの『宇津保物語』の贈答歌のように、「ひなどり」と「とぐら」とを組み合わせて詠んだ歌は、『新編国歌大観』に拠るかぎり、他には管見に入らない。これらの歌には、用いられている語のみならず、詠歌状況にも共通性が見出せよう。

「なにいそぐらむ」の例は、『古今集』にはなく、八代集においては、「うちはへてはるはさばかりのどけきを花の心やなにそぐらん」（後撰集・春下・九二・きよはらのふかやぶ・題しらず）、「かぞふればわが身につもる年月を送り迎ふとなにいそぐらん」（拾遺集・冬・二六一・かねもり・斎院の屏風に、十二月つごもりの夜）の二首がある。花が散ったり、年を重ねたりといったことを急ぐのはなぜか、理解に苦しむという心情の表現である。

四三四〇（ひなどり）

【本文】

春の野にあさなくひなのつまこふと身をいたづらになりけるかな

【校異】 ○春の野に―春の夜に（林） ○つまこふと身をいたづらに―妻こふる身を徒に（和） 妻こふと身をいたづらに（宮）

【語釈】 ○つまこふ 通常は、夫婦または雌雄が互いに相手を恋慕う意で、動物や鳥の場合は、雄が雌を求めて鳴くことをいう。ただし、当該歌は、ひな鳥が主語であるため、親鳥に餌を求め鳴き声の激しさを、妻乞いの声に喩えたと見た。 ○身をいたづらになりけるかな 「いたづらになる」は、ここでは身を減ぼす、死ぬ意。

【通釈】 春の野で、朝に鳴くひなが妻を恋慕うように声を上げて鳴くというので、身を減ぼすことになったのだなあ。

【他出】 なし

【考察】

春に生まれたひなが、野原にある巣の中で声を上げて鳴くと、大型の鳥や、動物、人間などの天敵に所在知られてしまっって捕らえられ、餌食にされたことを詠んだ歌であろう。

「春の野にあさなく」という同時代まで例としては、「春の野にあさる雉のつま恋に己があたりを人に知れつつ」（万葉集・巻八・一四五〇・一四四六・大伴宿禰家持が春の雉の歌一首）、「かりにくる人もこそきけ春の野にあさなくきじの近くも有るかな」（順集・二〇三・康保五年、女五男八親王の御屏風の歌／きじの鳴くをききて、山のさくらをみる）がある。このうち万葉歌は、『古今六帖』（第二・一一八七・きじ）にも載る。鳴き声で所在知られるという点では当該歌と共通するが、雉を詠む

例が一般的と言えるであろう。

また、「はるのの」「つまこ（ふ）」との組み合わせも、前掲の万葉歌の他、「春の野のしげき草ばのつまこひにとびたつきじのほろろとぞなく」（古今集・雑体・誹諧歌・一〇三三・平貞文・題しらず）があるが、やはり雉について詠んでいる。

なお、「つまこ（ふ）」という語は、鹿に用いることが多いが、鳥についていう場合は、もっぱら雉を詠む。「つまこふるさぎすのこゑも絶えなくにはかなくけふは家ぢくらしつ」（兼盛集・一七三・これもおなじ御屏風の歌／たかがりしたる所）は屏風歌で、屏風の図柄としても定着していることが窺える。他にも、「是を見よ人もさこそはつまこふる春のさぎすのなれるすがたを」（頼政集・六五七・或人のもとより千鳥を遣すとて申しつかはしける）という歌もある。そうすると、当該歌の「ひな」は、あるいは雉のひなか。

「身」が「いたづらになる」という表現は、『万葉集』には見当たらないが、平安期に入ると、『陽成院歌合』（延喜十二年夏）に、身を焦がす夏虫に、恋の思いで死にそうな我が身を重ねる「いたづらにみはなるてへどなつむしのおもひはえこそはなれざりけれ」（一・陽成院のなつむしのこひをだいにあはせさせたまへる／左持）、「こひすとてみはいたづらにならばなれわれなつむしになりやしなまし」（四・右）の二首の歌がある。また、

夏虫を詠み込まなくとも、生きて行けないほどの激しい恋情を詠んだ例も、古今集時代以降、見出される。「かくてのみわがおもふひらのやまざらば身はいたづらになりぬべらなり」（躬恒集・三三・ひらのやま）の他、「行きかへりみはいたづらになりぬとや命にかへよあはれとおもはむ」（九条右大臣集・三・おなじとの、おほ北のかたとわらはどち、きこえかはしたまひける）、「こひわびてみのいたづらになりぬともわするなわれによりてとならば」（元真集・二三七）などがあり、『信明集』には贈答歌「人やりにあらぬことにもあらなくに身もいたづらに成りぬべきかな」（六四・をとこ）、「身を捨てて思ふと見しはいたづらに成るべき事にかたれもせん」（六五・返し）がある。「あはれともいふべき人はおもほえてみのいたづらになりぬべきかな」（一条撰政御集・一・いひかはしけるほどの人は、とよかけにことならぬ女なりけれど、としつきをへてかへりごとをせざりければ、まけじとおもひていひける）は、後に『百人一首』にも収められた。いずれも恋歌であり、当該歌の内容はこれらの歌とは一線を画す。

四三四一（かひ）

【本文】

あしたづのかひこめくつるすごもりのつひにかへらぬ身とや

成りなん

【校異】 ○身とや成なん―身とやなりなん（永・松・羅・宮）身とや成なん（和・林・田・黒・寛）

【語釈】 ○あしたづ 葦田鶴。「鶴」の異名。葦が生える水辺に多く居ることからいう。 ○かひこめくつ 鳥などの生んだ卵

が、ずっと巣の中にあつてそのまま死ぬ。転じて、家にもつたまま世間に認められることなく終わる。「卵籠む」は、卵を（巣の中に）生み収める意。また、「朽つ」は、腐り果てる意。

○すごもり 巣の中に入ったまま外に出ないでいること。四三三八番〔語釈〕〔考察〕参照。第三句まで、「つひにかへらぬ身」を導く序詞。 ○かへらぬ身 「卵から」孵らぬ」に「帰らぬ」を掛ける。「帰らぬ身」は、二度と帰ってこない身、死んであの世へ行く身の意。

【通釈】 鶴が卵を生み収める巣が腐り崩れ、巣の中のまま、とうとう「孵る」ことがないように、私も世に認められぬまま死んであの世へ行く身の上になってしまふのだろうか。

【他出】 なし

【考察】

掛詞「かへらぬ（孵らぬ／帰らぬ）身」を要として、巣の中にある、孵化しない卵のように、私もとうとうこのまま死んでしまふ運命なのかという嘆きを詠んだ歌であろう。

鳥の巣に残る孵化しない卵は、「……なつさへちかく なるほどに まれにかへれる とりのこの つらき心を みるよりはかひにてなほぞ はてなまし……」（忠実集・八七・かひのくにまかりたりしほどに、たのみはべりしをんな、人になたち侍けるをききて、かへりまうできて）のように、稀に孵って（帰って）辛い目にあうよりは卵のまま朽ち果ててしまおうか、とも詠まれ、また、「巢守」という語で、「とりのこはまだひなながらたちていぬかひのみゆるはすもりなるべし」（拾遺抄・雑上・四七八・いぬかひのみゆ）という歌にも見出される。

「かひこ（め）」という語の和歌における用例は少ない。同時代には、「たちゐてぞちとせもみえんかたのすにかひこめみゆるたづはいくよぞ」（宇津保物語・くらひらきの上・七三四・左大将（兼雅）や、「ちぎりあれば いかのがれん むまるともかひこめくちて とりの子の かへりては身の うき事を おやのむすべる こころのうちに いつかあちはひ くくむごとくなくなくこもり 有りければ……」（賀茂保憲女集・一九四）を見出すみである。とくに後者は「かひこめくちて」とあり、当該歌の第二句と同じ語句を用いている。なお、後世の「すもりごのいひいでぬことのいぶせさにかひこめくつるみや成りなん」（基俊集・一六二・はじめのこひ）は、当該歌を踏まえた詠であろう。

「かへらぬ身」という表現は、意外と和歌に見当たらない。だが、『土左日記』の「みやこへとおもふをものかなしきはかへらぬひとのあればなりけり」(三・あるひと)が、「(都へ一緒に) 帰らぬ人」の意に、「(死んで) 帰らぬ人」の意を掛けていることから、当該歌においても、死んで二度と帰って来られない我が身の意を読み取ることができよう。

「身とや成りなん」という句の同時代の例には、「はかなかる夢のしるしにはかられてうつつにまくる身とやなりなん」(後撰集・恋四・八七一・大江千里、まかりかよひける女をおもひかれがたになりて、とほき所にまかりにたりといはせて、ひさしうまからずなりにけり、この女、思ひわびてねたる夜の夢にまうできたりと見えければ、うたがひにつかはしける)の他、「おもふ事ははやみなば山しろのとはにくるしきみとやなりなむ」(元真集・二二七)、「ながめつつつひにくちにしたち花はつねにそらなるみとやなりなむ」(宇津保物語・まつりのつかひ・二五三・少将(仲頼)、「うきことのつひにたえずは神にさへ恨をのこす身とやなりなん」(増基法師集・六三・まかりいでしに、さぶねに)などが見える。我が身のつらさをいうのが一般的である。

四三四二(かひ)

【本文】

とりのこはかへりてのちぞななれける身のかひなきをおもひしりつつ。

【校異】 ○ななれける―ななれけり(五本)(宮)

【語釈】 ○とりのこ 鳥のひな。 ○ななれける 「れ」は自発。

○身のかひなき 「かひなし」は「卵無し」(卵の殻が無い)に、「甲斐無し」(取るに足りない)の意を掛ける。

【通釈】 鳥のひなは、卵がかえって後に初めて自然と鳴くことだ。

身体に卵の殻が無いこと―我が身が取るに足りないこと―を痛感しながら。

【他出】 なし

【考察】

掛詞「かひ(卵/甲斐)無し」を要として、卵から孵った鳥のひなが自然に鳴き始めるのは、身に卵の殻をまもっていないのを思い知ったことであるとともに、取るに足りない我が身を痛感してのことと見た歌である。

当該歌と同様の掛詞を用いた例としては、「すもりこもたちにけるかとみるにこそかひなきみさへうらみ(七本)あられけれ」(忠見集・一七六・おなじみやすどころの、まかだたまひけるにしばしとまりて、あるをんなのいでにけるに)を、かろうじて見出

す。

なお、結句「おもひしりつつ」は、後世の例であるが、「さてもなほこころにこめてなげかな身をうきにのみおもひしりつつ」(新撰六帖・第五・一三七八・知家・いはでおもふ)、「わが身にてみのなげきをぞなくさむるうき身の程を思ひしりつつ」(拾玉集・一五八)などが、わずかながら挙げられる。『新撰六帖』の知家歌の下旬は、当該歌を踏まえたものか。

四三四九 (つる)

【本文】

たづのたつさはべになみやさわぐらんあしのみぎはのどけからぬは

【校異】 ○あしのみきはたづのたつさはへにのどけ―たづのたつさはへに(永)たづの立沢へに(松・和・林) たづの立澤へに(羅・寛) たづのたつ沢へに(宮・黒) たづのたつ沢邊に(田) ○さわぐらん―さはくの(和)さはしのくらん巻(宮) ○あしのみきはの―芦の汀(田) ○とけからぬは―とけからぬは(永)のとけからぬか(松)のとけからぬは(和・羅・宮・田・黒・寛)ゝとけからぬは(林)

【語釈】 ○たづのたつ 「たづ」は鶴。葦辺に多く居る。「たつ」は、飛び上がる、飛び立つ。 ○さはべ 沢のほとり。 ○な

みやさわぐらん 「さわぐ」は、波などが動いてざわざわと音をたてる意。係助詞「や」は疑問。現在推量「らん」の連体形で結ぶ。 ○あしのみぎは 「あし(葦)」は水辺に群生するイネ科の多年草。「みぎは(汀)」は、水のほとり、水際。 ○のどけからぬは 「のどけし」は、静かで穏やかなさまをいう。

【通釈】 鶴が飛び立つ沢のほとりに波がざわざわと音を立てて打っているのだろうか。葦が生えている水辺の様子が穏やかでないのは。

【他出】 なし

【考察】

眼前の葦辺の様子がざわついているのは、沢に居る鶴が飛び立ち、羽風で立った波がここまで伝わってきたのだろうかと推量した歌である。

「さはべ」の「たづ」と「あし」は、「たづのすむさはべのあし」のしたねとけみぎはもえいづる春はきにけり(能宣集・一一六・小野宮の賀おこなひたまふ屏風のれうの、春)に見えるように、屏風歌としても詠まれる歌材である。また、「たづ」の羽風に「なみ」が「さわぐ」という歌、「けふはよしかりにもいでしたまもぐさたづのは風になみさわぐなり」(重之子僧集・二一・屏風のゑに、もかりぶねのいづるみなとにたづのむれゐたるに、なみのさわぐをながめたる所)も、屏風の絵について

詠まれている。いずれも屏風絵の図柄として定着していることが窺える。

「あし」と「みぎは」の組み合わせは、「なにはがたみぎはのあしのおいがよに怨みてぞふる人の心を」（後撰集・雑二・一一七〇・よみ人しらず・まかりかよひける女の心とけずのみ見え侍りければ、年月もへぬるを今さへかかるといひつかはしたりければ）、「難波がた汀のあしのおひ風にうらみてぞふる人のところを」（兼盛集・五一・なほいとつらかりける女に）、「ほにいでたるみぎはのあしのあしたづのちよにかはらぬ色にぞありける」（道濟集・二二二・大納言殿大井遣遙日、和歌二首／翫蘆花）というように、「みぎはのあし」のかたちで、葦を主眼として詠まれることが多い。

「あしのみぎは」の用例としては、「けをさむみあしのみぎはもさえぬれば流るとみえぬ池の水鳥」（和泉式部統集・三三一・十二月、人のもとより、よみにおこせたりし／水鳥）、「あまぶねのたよりならぬにさはりおほみあしのみぎはをわけてこそくれ」（大斎院前の御集・一六四・むま）、「若葉さす蘆の汀に浪寄るはこや三島江の渡りなるらん」（栄花物語・松のしづえ・五七八・民部権大輔政長朝臣）があるが、いずれも詠歌時期は下る。

四三五二（つる）

【本文】

あしたづのすみさはにおふるすがのねのねんごろにみぬ君はたのまず

【校異】 なし

【語釈】 ○すがのねの 枕詞。「ね」の同音反復で「ねんごろ」に付く。また、第三句までは序詞。 ○ねんごろに 懇ろに。心を込めて。心の底から慕うさま。

【通釈】（鶴の住む沢に生える菅の「根」の）「ねんごろに」——心を込めて——私に逢わないあなたのことには頼りにしない。

【他出】 なし

【考察】

葦田鶴の住む沢、沢に生える菅の根、菅の「根」と同音から始まる「ねんごろ」というように歌語の連想を繋いでいき、「ねんごろ」ではない、不誠実な恋人を責める歌である。女性の立場での詠か。

沢に棲む葦田鶴は、『後撰集』の「葦たづの沢辺に年はへぬれども心は雲のうへのみこそ」（恋三・七五三・右大臣・女四のみこにおくりける）と「あしたづのくもぬにかかる心あらば世をへてさはにすまずぞあらまし」（恋三・七五四・返し）や、『円融院御集』の「年へつつくもあはなれてあしたづのいかなるさ

はにすまんとすらむ」(一八・重之^{集相如也}がかうぶり給はりておるるに、いかがおもふとおほせられければ)と「あしたづの雲のうへにしなければさはにすむともかよはざらめや」(一九・おほせごと)のように、贈答歌にも見られ、寓意をもって詠まれることが多い。

沢に生える菅の根を詠んだ歌としては、「かきつはた開沢に生ふる菅の根の絶ゆとや君が見えぬこのころ」(万葉集・巻十二・三〇六六・三〇五二)が挙げられよう。「開沢」の訓は、現代の新訓では地名「さきさは(佐紀沢)」とされるが、西本願寺本の訓では「サクサハ(咲く沢)」である。

「すがのねのねんごろ(ねもころ)」という表現は、『万葉集』に集中して見られる。「あしひきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲しき君かも」(巻四・五八三・五八〇・余明軍、大伴宿禰家持に与ふる歌二首)は、当該歌と同じく「見る」を修飾する例である。

また、「すがのねの」を冠しない「ねんごろ(ねもころ)」にみ(ぬ)「^ぬ」という表現も、『万葉集』に、「天飛ぶや 軽の道は 我妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど……」(巻二・二〇七・二〇七・柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首(并短歌))という例を見出す。

「君はたのま(ず)」の用例としては、複数の歌が『古今六帖』

に収められる。当該歌の他に、「そま山にたつすぎくれのおもて おもて人にひかるる君はたのまじ」(第二・一〇一六・そま)、「なよたけにえださしかはすしのすすきよませにみえむ君はたのまじ」(第五・二七四四・一夜へだつ)の二首の歌がある。また、「ながれてはたつたの河のそこすむかめのこふともきみはたのまん」(夫木抄・巻二十四・一一〇一九・よみ人不知・たつた川、大和/かめ、六帖)も、集付を信ずれば『古今六帖』所収歌であったと見られよう。現時点では、同時代の他例は管見に入らない。これらの歌は、あるいは同一文化圏における詠か。

附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」(同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号16K00469、二〇一六―二〇一八年度)の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器[◇]eCSA Ver.200[◇]を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖、4329〜4354番―

- 4329 とり
いにしへをこふるふちかもゆづるはのみゐのうへよりなきわた
り行く
- 4330 2-1万葉111「いにしへに」「こふるとりかも」
むらどりのたちにしわがないまさらにことなしぶともしるしあ
らめや
- 4331 1-1古今674、2-13新撰和272
冬山にひとりぬるとりよをさむみ人はたえけるきをぞもとむる
〈未詳〉
- 4332 とりならばあたりのきぎにかくれるてほれたるこゑに我なかま
しを
- 4333 7-6忠岑35「なかましものを」、3-13忠岑49「わびたるこゑ
に」「なかましものを」
夏そひくうなかみがたのおきつすにとりはすだけど君はおとも
せず
- 4334 2-1万葉1179
なつかりの玉えの蘆をふみしだきむれる鳥のたつ空ぞなき
〈未詳〉 1-4後拾遺219
ゑにかけるとりとも人に見てしかなおなじ所につねにとふべく
1-2後撰709「鳥とも人を」「おなじ所を」
いもが手を鳥このいけのなみまよりとりの音聞ゆ明けぞしぬら
し
- 4336 2-1万葉2170
「とろしのいけの」「なみのまゆ」「とりがねけに

- 4337 はなちどり
はなち鳥行へもしらずなりぬればはなれしことぞくやしかりけ
る
〈未詳〉
- 4338 ひなどり
ひな鳥のかざきりよわみとばれねばすごもりながらねをのみぞ
なく(なりひら)
〈未詳〉
- 4339 明けぬとてなにいそぐらむひなどりのまだとぐらなるこゑにや
はあらぬ
〈未詳〉
- 4340 春の野にあさなくひなのつまこふと身をいたづらになりにける
かな
〈未詳〉
- 4341 かひ
あしたづのかひこめくつるすごもりのつひにかへらぬ身とや成
りなん
〈未詳〉
- 4342 とりのこはかへりてのちぞなかけける身のかひなきをおもひし
りつつ
〈未詳〉

- 4350 ねば
あまぐもにはねうちつけてとぶたづのたづたづしかも君きまさ
2-1万葉 2495 「きみしいまさねば」
- 4349 ねば
たづのたづさはべになみやさわぐらんあしのみぎはののどけか
3-15伊勢集 164
- 4348 ねば
はする (伊勢)
- 4347 ねば
ちとせまで命たもてるつるなれば君がゆききをしたふなりけり
3-19貫之 394 「むれてをる」
(つらゆき)
- 4346 ねば
むれてゐる蘆べのたづをわすれつつみづにもきえぬ雪かとぞ見
1-1古今 919、2-3新撰和 273
- 4345 ねば
蘆たづのたてるかはべを吹くかぜによせてかへらぬなみかとぞ
3-19貫之 133
- 4344 ねば
千とせふとわがきくなへにあしたづのなきわたるなるこゑのは
るけさ (つらゆき)
- 4343 つる
かは風になびくあしたづおのが世をなみとともにや君によすら
ん (つらゆき)
3-19貫之 349 「河のせに」

- 4354 ねば
蘆たづのすまふ入えのしらすげのしらすや君はわがこふらくを
77 「あしべをわけて」
(人丸)
- 4353 ねば
わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづな
きわたる (あかひと)
2-1万葉 924、2-5金玉 48、3-2赤人 115、3-2赤人 352、5
1-52前十五 30、5-1 264和十種 2、5-1 265和十体 2、5-1
267三十六 46、2-1 6和漢朗 451 「しほみちくらし」、5-1 268深窓秘
- 4352 ねば
あしたづのすむさはにおふるすがのねのねんごろにみぬ君はた
のます
(未詳)
- 4351 ねば
たつきなきあしべをさしてとびわたりあなたづたづしひとりさ
ぬれば
2-1万葉 3648 「たづがなき」「とびわたる」

